

南北600キロの教育

～へき地・複式教育の手引～



今、求められる、これからの授業とは「学習者主体の授業」です。そして、教師に求められるのはティーチングではなくファシリテーター的な役割です。

複式学級においては、ますます間接指導の充実が大きなカギとなります。

本手引が、複式学級における授業の進め方等の手掛かりとして活用され、へき地・小規模校の教育が更に充実することを期待しています。

●学級規模別にみた県下の学校

(令和4年5月1日現在)

学級数	1～2	3～5	6～11	12～18	19～30	31～50	計
小学校	26	158	166	57	57	20	484
中学校	26	69	57	32	20	1	205
義務教育学校	0	3	3	2	1	0	9

●複式学級を有する学校の状況

(令和4年5月1日現在)

	学校数	学級数
小学校	229	491
中学校	22	22
義務教育学校	6	18

●山村留学・小規模校入学特別認可制度実施状況

(令和4年5月1日現在)

	山村留学制度		小規模校入学特別認可制度	
	受入体制あり	受入あり	受入体制あり	受入あり
市町村数	21	16	22	21
学校数(校)	小63, 中28, 義5	小41, 中17, 義5	小100, 中20, 義2	小63, 中11, 義1
児童生徒数(人)		小160, 中60, 義32		小542, 中115, 義22

令和5年3月



鹿児島県教育委員会

自律した学習者を育成する複式学級

本県には、複式学級を有する学校が数多くあります。県全体の学級数に占める複式学級の割合は、小学校、中学校共に全国で1番です（令和3年5月1日現在 教育行政基礎資料より）。今後、少子化の流れを受け、さらに複式学級を有する学校は増えてくるものと思われます。

県内全域の人事交流が行われている本県の教員等は、複式学習指導に触れる機会があります。この複式学級を中心に積み上げてきたガイド学習等の児童生徒主体の学習指導は、「個別最適な学び」と「協働的な学び」が一体化した令和の時代に適した学びとも言えるものです。また、そこで培われた実践やノウハウを共有し合うことで、複式学級における視点を単式学級での指導にも生かし、自律的な児童生徒の学びを広げていくことも可能です。

そこで、まずは、複式の学習を展開する場合、指導計画をどのように作成するかが重要なポイントになります。各指導形態の特徴を踏まえるとともに、自校や児童生徒の実態を考慮し複式学級が継続するのか、解消される時期があるのかなど、中・長期的な見通しをもって、指導計画を作成することが大切です。

指導形態には、学年ごとに学習を行う「学年別指導」と、二つの学年を一つの学級とみなして指導する「同単元指導」があります。

「学年別指導」は、同じ時間に、二つの学年で別々に教科を設定します。仮に、同じ教科を設定した場合でも、それぞれの学年の内容を指導するものです。

一方、「同単元指導」は、同じ時間に、二つの学年で同じ内容等を設定します。教科の特性を生かしながら、両学年の内容を二年かけて指導を行います。

【複式学級の指導形態と指導計画】

指導形態		指導計画	
主に学年ごとに別々に進める指導形態	学年別指導	一年ごとの計画	
	一本案による指導		
主に二つの学年を一つの学級とみなして指導する形態	同単元指導	二本案による指導	A年度 B年度
		折衷案による指導	二年にわたる計画
		完全一本案による指導	一年ごとの計画

指導計画	学年別指導	一本案 同単元であるが、上・下学年それぞれの目標を達成できるよう、内容や到達目標を変える。 ※ 系統性をもった内容を学年別に二年繰り返し指導する。
		二本案 同じ内容・同じ学習目標（A年度、B年度） ※ 両学年の内容をA年度、B年度の二年間に平均的に分配し、どの学年においても両学年に同じ内容を同じ目標で、同じ方法で指導する。
	同単元指導	折衷案 一本案と二本案の両方の要素を取り入れる。 ※ 一本案を主体にしながら一部に二本案を取り入れたり、二本案を主体にしながら一本案を取り入れたりする。重要な内容や理解が困難な内容は、A・B両年度で取り扱うなども考えられる。
		完全一本案 二つの学年の内容を一年間で学習に構成 ※ 両学年の内容を一年間で学習できるように教材を精選して単元を構成する。（体育科や図画工作科に多い。）これを二年間繰り返して、指導する。

「複式学級」の編制は、低・中・高の一般的な編制の他に、2年・3年の変則複式など学校によって様々な編制があります。

複式学級の授業（間接指導で学習者主体の授業へ）

学年別指導の授業では、教師が一方の学年に指導する「**直接指導**」と、もう一方の学年が児童生徒だけで学習を進めていく「**間接指導**」を組み合わせる指導することが基本となります。

教師が一方の学年から他方の学年へ交互に移動して直接的な指導をしていく、この教師の動きを、「**わたり**」といいます。一般的には、課題把握—課題追究—解決・定着—適用・発展の四つの過程で学習活動が展開されます。

指導の工夫として、例えば、教師が「課題把握」の過程を下学年で直接指導している場合、上学年は児童生徒だけで前時の適用問題を使っての復習などに取り組む「適用・発展」の過程を行うなど、指導段階をずらす方法があります。このように、両学年の指導段階をずらして学習を進めることを、「**ずらし**」といいます。

【複式学習指導の流れの例】

主な学習活動 (下学年)	過程	教師の動き	過程	主な学習活動 (上学年)
1 学習のめあてや学習方法の確認 2 新しい学習内容の課題把握 ・予想を立てる ・解決の見通しをもつ	課題把握	直接指導	適用・発展	1 学習のめあてや学習方法の確認 2 既習事項を基にした練習問題や発展問題への取組 (個, グループ等で)
3 課題解決のための試行活動 ・学習資料による活動 ・話し合い活動 ・ICTを活用した活動	課題追究	間接指導	課題把握	3 新しい学習内容の課題の把握 ・予想を立てる ・解決の見通しをもつ
4 課題解決活動の結果の報告 ・解決までの過程を発表する。 ・結果を吟味する。 ・学習のまとめをする。	解決・定着	直接指導	課題追究	4 課題解決のための試行活動 ・学習資料による活動 ・話し合い活動 ・ICTを利用した活動
5 本時の学習内容を基にした練習問題や発展問題への取組 (個, グループ等で)	適用・発展	間接指導	解決・定着	5 課題解決活動の結果の報告 ・解決までの過程の発表 ・結果を吟味する ・学習のまとめをする
6 本時と次時の確認				6 本時と次時の確認

上学年と下学年の指導過程をずらすこと（**ずらし**）によって一方の学年を指導しているとき（**直接指導**）、他の学年は自分たちで主体的に学習を進める（**間接指導**）ことになります。

教師が学年間を交互に移動する指導（**わたり**）を行う場合は**間接指導のための十分な手立て**をしておくことが重要です。

《「わたり」の留意点》

- ① 児童生徒が自分たちで自主的に学習ができるような「学び方」を育成すること
- ② 直接指導での適切な指示等により、児童生徒自身が間接指導時に何をすることが明確になっていること

課題追究の過程における間接指導は、ICTを活用したり、話し合い活動を取り入れたりするなど内容に応じて工夫します。ドリルなどの課題をさせっぱなしにする時間ではありません。

同時間接指導でより学習者主体の授業へ

間接指導の時間は、教師が直接的に指導するのではなく、児童生徒が互いの考えをつないだり、意見を重ねたりしながら学び合う時間です。児童生徒だけで自主的に学習を進めていく方法や態度を身に付ける重要な機会になります。ここでは特に、同時間接指導を紹介します。具体的には、「わたり」や「ずらし」を何度も設けず、児童生徒の思考の流れに応じた同時導入・同時終末を仕組み、2学年が同時に「課題追究」に入ることで、教師が直接指導を行わない間接指導の時間（同時間接指導）を生み出す学習過程です。この同時間接指導は、自分たちで課題解決のために主体的な学習活動を展開させていくことができるので大変効果的です。そこでは、教師は、柔軟に両学年をわたりながら、子供たちだけでは難しい部分についての適切な支援を行うなどのファシリテーター的な役割が求められます。

【従来の「ずらし」を取り入れた学習過程】

主な学習活動 (下学年)	教師の動き	主な学習活動 (上学年)
1 学習のめあてや学習方法の確認 2 新しい学習内容の課題把握	課題把握 直接指導 間接指導	1 学習のめあてや学習方法の確認 2 既習事項を基にした練習問題や発展問題への取組
3 課題解決のための試行活動	課題追究 間接指導 直接指導	3 新しい学習内容の課題の把握
4 課題解決活動の結果の報告	解決・定着 直接指導 間接指導	4 課題解決のための試行活動
5 本時の学習内容を基にした練習問題や発展問題への取組 6 本時と次時の確認	適用・発展 間接指導 直接指導	5 課題解決活動の結果の報告 6 本時と次時の確認

【「同時間接指導」を取り入れた学習過程】

主な学習活動 (下学年)	教師の動き	主な学習活動 (上学年)
1 学習のめあてや学習方法の確認 2 新しい学習内容の課題把握	課題把握 同時導入 直接指導 同時導入 間接指導	1 学習のめあてや学習方法の確認 2 新しい学習内容の課題把握
3 課題解決のための試行活動	課題追究 同時 間接指導	3 課題解決のための試行活動
4 課題解決活動の結果の報告	解決・定着 直接→間接 間接→直接	4 課題解決活動の結果の報告
5 本時の学習内容を基にした練習問題や発展問題への取組 6 本時と次時の確認	適用・発展 同時終末 同時終末	5 本時の学習内容を基にした練習問題や発展問題への取組 6 本時と次時の確認

同時導入・同時終末、同時間接指導を取り入れるよさ

- ◎ 上・下学年とも一単位時間内に同じ流れで学習過程を進めることができ、児童生徒の思考の流れが途切れにくい。
- ◎ 教師が児童生徒の学びに適度に（これがポイント）関わることができ、児童生徒の思いを多く引き出すことができる。

間接指導（ガイド学習）の充実

ガイド学習とは

間接指導の効率化を図るため、児童生徒の中から選ばれたガイド（学習の案内役）が、教師の指導のもと、学習計画に従い、他の児童生徒たちをリードしながら、相互に協力し合い、助け合って学習を進めるものです。

ガイドを育成するに当たって

ガイドになった児童生徒は、学習をリードするという役目を担っているため、聞く力や相手に伝える力を伸ばし、主体的に学習に取り組む姿勢を身に付けることができます。教師は、ガイドを一人に固定せず、学級全員ができるようになるまで、計画的・段階的に指導していくことが必要です。

また、ガイドの育成とともに、フォロワー（ガイド以外の児童生徒）の学び方の育成にも努める必要があります。

ガイド学習を進めるに当たって

教師は、指導すべきことと、ガイドに任せるとの設定を誤らないように、事前に十分教材研究をする必要があります。

- 可能な限り、事前に教師とガイドの打合せを行いましょう。
（学習の大まかな流れ、指名の仕方や順番、ヒントコーナーの活用の仕方やタイミングなど）
- 打合せの時間が十分に確保できない場合には、メモを渡したり、カードを作ったりして、ガイドが困らないよう工夫しましょう。

小規模校、少人数学級における工夫

〔合同学習〕

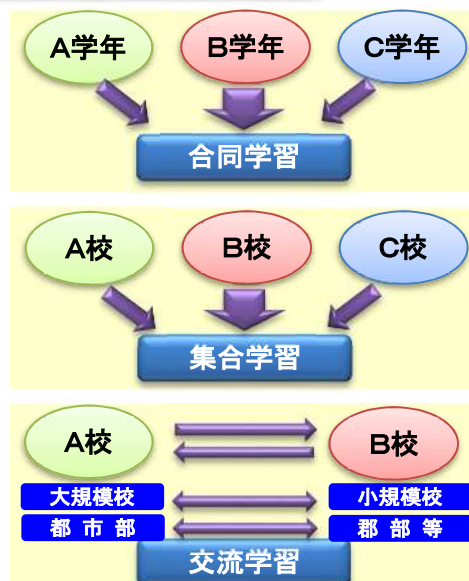
学校内で、学年・学級の枠を超えて複数学年が同じ題材（教材）で行う学習です。各学年の指導目標や内容を踏まえて共通の目標を設定します。音楽、図画工作（美術）、体育（保健体育）等で実施されていることが多いようです。

〔集合学習〕

近隣の二校以上の小規模校の児童生徒が一か所に集まり、自校だけではできない教育活動を展開する学習を指します。共同で行う学習活動の教育効果を高めるため、各学校で事前事後の学習活動の充実が不可欠です。内容、指導方法、時期等について学校間で事前に共通理解を十分に図る必要があります。

〔交流学習〕

学校規模や生活環境の異なる学校間で交流しながら行う学習です。遠方の学校と交流学習を行うには宿泊を伴う場合があります。相手校との連携はもとより、保護者や教育委員会との連携を密接に行うことが必要です。また、ICTを活用することで、移動を伴わない交流を行うことも可能です。



山村留学・特認校制度とは

- 山村留学制度
小規模の学校が、県外等からの児童生徒を受け入れ、学校教育の振興・充実や地域の活性化を図ることを目的として、市町村、学校及び地域が主体となって実施する制度です。
- 特認校制度（小規模校入学特別認可制度）
各市町村立の小・中学校及び義務教育学校では、居住地により通学する学校が指定されますが、小規模校では市町村教育委員会が認めた場合に限り、同一市町村内の他の学校の校区からも通学できる制度を取り入れているところもあります。山村留学と異なり、自宅から通学する場合が一般的です。

へき地・小規模校教育に関する研修

へき地・小規模校教育を支援するWebページ

- 鹿児島県教育委員会ウェブページ
(<https://www.pref.kagoshima.jp/kyoikubunka/school/hekichi/hekichi/index.html>)
 - ・ へき地小規模校教育（山村留学 等）
- 県総合教育センターのウェブサイト (<http://www.edu.pref.kagoshima.jp/>)
 - ・ へき地・複式教育
- 複式学習指導の基本的な進め方や留意点や動画や研究提携校の研究実践を通して具体的に紹介しています。
- 複式学習指導の不安を解消する情報や校内研修に活用できる情報を提供しています。
 - ・ **テレビ会議システムF@ceネット（つらネット）**
遠方の学校との交流学习、博物館や専門家と結んでの学習、離島の学校と教育センターを結んでの職員研修などテレビ会議システムを活用すると、効果的な学習等が展開できます。
- 鹿児島大学附属小学校
 - ・ 複式学級の指導を語る会（各学校の実践発表 等）



県教委 web



へき地・複式教育



つらネット

令和5年度研修講座

県総合教育センター移動講座 「自ら学び自ら考える複式学級における学習指導講座」

- オンライン講座（リモートで実施予定）2講座
- 移動講座 鹿児島地区（1講座）、北薩地区（甕島：1講座）、始良・伊佐地区（1講座）、大隅地区（曾於：1講座、肝属：1講座）、熊毛地区（屋久島：1講座）、大島地区（奄美大島：1講座、冲永良部島：1講座）

令和5年度主な研究大会

- 全国へき地教育研究大会兵庫大会 令和5年10月12・13日
- 鹿児島県へき地・小規模校教育研究大会大島大会 令和5年10月17日
- 九州地区へき地・小規模教育研究大会熊本大会 令和5年10月26・27日

複式学習指導実践事例

- 国語
(3・4年) 「すがたをかえる大豆」「世界にほこる和紙」
(3・4年) 「海をかつとばせ」「一つの花」
(5・6年) 「千年の釘にいどむ」「森へ」、(「天気を予想する」、『鳥獣戯画』を読む)
 - 算数
(1・2年) 「たしざん」「かけ算(1)」
(3・4年) 「円と球」「式と計算」、(「かけ算」「わり算」)
(5・6年) 「割合(1)」「拡大図と縮図」、(「体積」「立体の体積」)
 - 理科
(5・6年) 「生命のつながり」「植物の体のつくりと働き」
 - 外国語活動
(5・6年) 「ようこそ奄美大島へ～笠利町の魅力を紹介しよう～」
- ※ 複式学習指導実践事例の指導案は県教育委員会のウェブページで御覧ください。



指導実践事例

南北600キロの教育～へき地・複式教育の手引～
令和5年3月
鹿児島県教育委員会（連絡先：義務教育課）